

## 12. 古墳にならべられた埴輪

埴輪は粘土でできた焼き物です。埴輪は3世紀後半から6世紀、すなわち卑弥呼が亡くなった頃から聖徳太子が活躍する直前頃まで見られます。埴輪を大きく分けると、筒の形をした円筒（えんとう）埴輪と、人や馬、家の形をした形象（けいしょう）埴輪があります。このうち最も多いのが円筒埴輪で、古墳の平坦な部分に列をなして並べられました。円筒埴輪は、弥生時代に壺をのせる台として使われていた土器が大形化し、お墓に並べられたことに由来します。したがって、埴輪の中で円筒埴輪や壺形埴輪が最も古いのです。

その後、家の形をした埴輪が作られ始めるようになり、やがて矢をいれる道具のユキや身分の高い人にさしかける傘の形をしたキヌガサ、盾、ヨロイ・カブトなどが現れます。人物埴輪や動物埴輪の多くは古墳時代中期、すなわち古市古墳群・百舌鳥古墳群が造られた5世紀に現れます。人物埴輪には巫女や武人、動物埴輪にはウマ、イノシシ、イヌなどがあります。

人物埴輪群が並べられた意味として、王位を引き継ぐ儀式を表したとする説、死者の生前の活躍を表したとする説、死者を弔う儀式を表したとする説、あの世の理想郷を表したとする説、などがあります。どの説が正しいかは、現在でも決着していません。さあ、あなたは、どの説に魅力を感じますか？